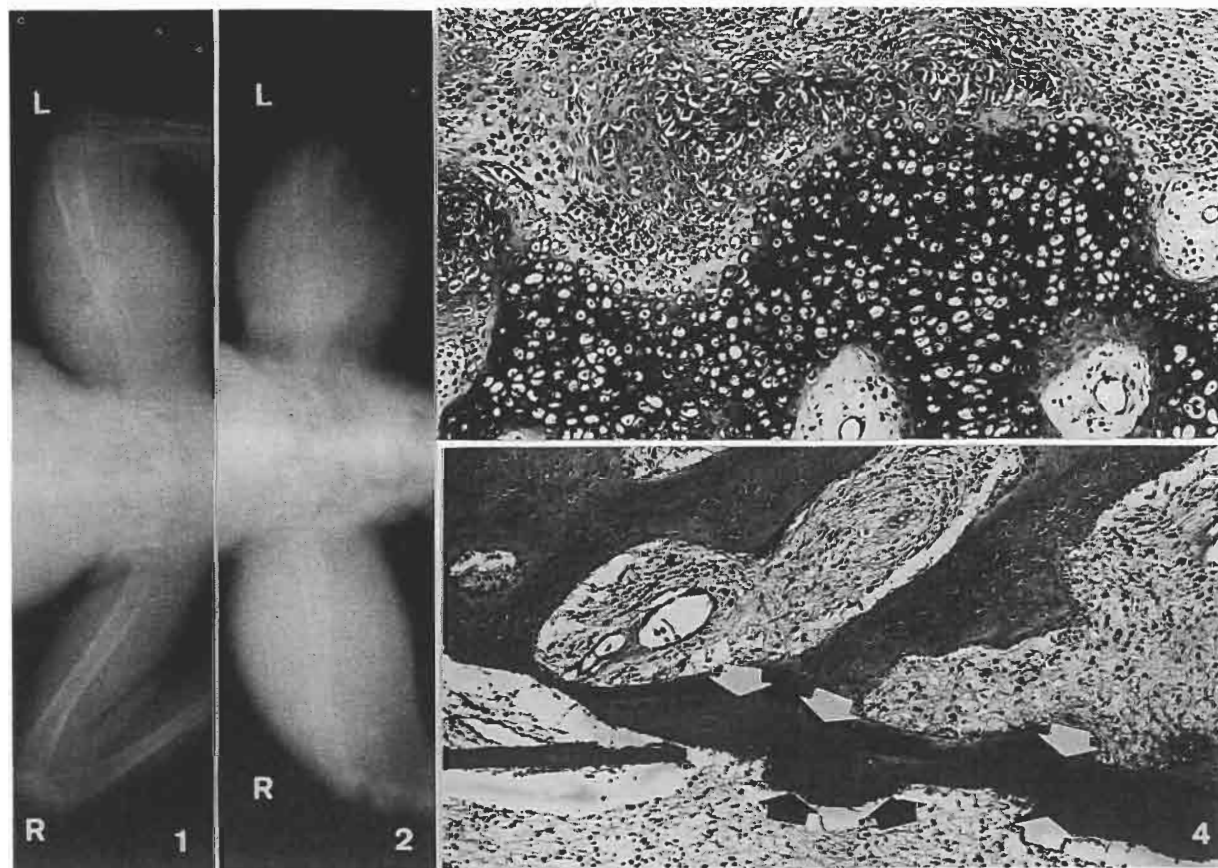


イグアナの大腿骨

日本獣医畜産大学獣医病理学教室出題 第36回獣医病理学研修会標本No.678



動物：グリーンイグアナ，雌，年齢不詳。

臨床的事項：6ヵ月間ペットとして飼育されていたが、左大腿部が腫脹してきたため某動物病院に来院。X線検査では同部骨幹部において軽度の骨吸収像が認められた(写真1)。その後、右大腿部、両側上腕部も腫脹し、歩行困難となった。来院後3ヵ月目に一般状態が悪化し死亡した。死亡時のX線検査では、左大腿部の骨吸収像は一層顕著で、骨幹部皮質骨の輪郭は消失していた(写真2)。軽度の骨吸収像が右大腿骨および右上腕骨骨幹部でも認められた。動物には餌として少量の野菜とビタミン剤が与えられていた。

剖検所見：送付された左右大腿部は腫脹し、未脱灰のままでも切断が比較的容易であった。断面では大腿骨骨幹部を厚く包囲する灰白色軟骨様組織が認められた。腫脹がより顕著であった左大腿骨を提出標本とした。

組織学的所見：病変は骨幹部に主座し、わずかに残存する皮質骨と、その周囲に厚く発達した外骨膜由

来の軟骨と類骨層から形成されていた。筋層と軟骨層間には未分化間葉系細胞の増殖が見られた(写真3, $\times 160$)。既存の皮質骨は一部に残存するのみで、その周囲は線維化し、さらに外骨膜側には新生の類骨性骨梁とその間隙に幼弱な線維性結合織の増殖が認められた(写真4, $\times 160$, 矢印)。右大腿骨の病変も同質であったが、破骨細胞性骨吸収像が目立つ一方で、既存の骨質は提出標本よりも保持されていた。

考察：本病変は、いわゆる『イグアナの栄養性骨異栄養症』に類似し、主因として低Ca食餌が考えられた。提出標本では骨吸収は概ね終息し、逆に修復性的変化が優勢である。軟骨の過剰増殖はこの種特有のものと解釈される。X線像の経時的推移から、右大腿骨の組織所見が提出標本の前段階病変にあたるものと思われた。本例は成長期の動物であり、かつ病変が骨幹部に主座することから骨軟化症、クル病とは区別される。

診断：イグアナの線維性骨異栄養症。